

過時間を算出する方法に比べて閑心領域を設定する必要がないため再現性が良く、局所的な時間の異常が容易に判定できる点で優れていると考えられた。

20. HBs Ag·RIA キット(固相法・トラベノール)の基礎的検討

松尾 定雄	樋口ちづ子	川地 俊明
安田 銳介	市川 秀男	木村 得次
金森 勇雄	(大垣市民特殊放センター)	
中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	小沢 洋	熊田 卓
浜野 博次	杉山 公一	(同・二内)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

〈はじめに〉

現在 HBs 抗原の測定には RIA が最も感度が高く操作も比較的簡便なため広く普及している。しかし判定方法として陰性コントロール 7 本の平均値に 2.1 倍したカットオフ値を境に陽性陰性の判定がなされている。HBs 抗原量の目安として検体の cpm 値をカットオフ値で除したカットオフインデックスが使用されているが必ずしも抗原量の多い検体のカットオフインデックスが高くならない場合がある。今回われわれはトラベノール社よりガムマコート HBs 抗原キットを使用する機会を得たので報告する。

〈結果〉

1. 標準曲線の再現性

各濃度にて C.V.(%) は 6.5~45.2% であった。

2. Incubation 時間の影響

第 1 インキュベーション時間は 2~3 時間、第 2 インキュベーション時間は 20 時間が必要である。

3. Incubation 温度の影響

第 1 インキュベーション温度は 45°C、第 2 インキュベーション温度は各温度にて差は認められなかった。

4. 回収試験

4 例を対象とした回収率は 103.5~122.2%，77.2~89.1%，67.5~145.2% であった。

5. 希釈試験

高濃度検体血清は 10 倍以上、低濃度検体血清は 2 倍以上の希釈操作が必要である。

6. 日差、同時再現性

6-a) 日差再現性

2 例を対象とした C.V.(%) は 12.2%，17.2% と良好な結果が得られた。

6-b) 同時再現性

低濃度陽性検体 5 例を対象とした C.V.(%) は 28.8~53.3% の間にあった。

高濃度陽性検体 4 例を対象とした C.V.(%) は 5.9~11.0% の間にあった。

7) 他社キットとの相関

7-a) Ratio 表示での相関係数は 0.664 ($p < 0.01, n = 33$)

7-b) ng 表示での相関係数は 0.828 ($p < 0.01, n = 16$) といずれも良好な結果が得られた。

以上本キットでの定量的測定は可能であり、今後さらに検討すべき必要性が有りうるものと考える。

21. HAVAB-M Kit の使用経験

後藤 明	奥 孝行	(県立岐阜・放)
宇土 一道	足立 信幸	廣瀬 洋
(同・二内)		

〈はじめに〉 Dinabot 社により開発された HAVAB-M kit は A 型肝炎ウィルスに対する IgM 抗体を検出するキットであり、その使用経験につき報告する。

（結果）基礎実験として inter assay における counts のバラツキ、between assay における再現性テストを行ったところ共に良好な結果を得た。

B 型肝炎を除く肝炎 60 例の急性期血清を用いて IgM 抗体を測定した結果、22 例が cut off index 1 以上 (max: 9.37 min: 3.85 $\bar{x} \pm S.D.$: 5.69 ± 1.45) となり、これらを A 型肝炎と診断した。また cut off index が 1 より小さいものが 38 例あり (max: 0.71 min: 0.27 $\bar{x} \pm S.D.$: 0.37 ± 0.08)、これらを non A non B 型急性肝炎と診断した。

今年度、当院を受診し A 型肝炎と診断された 4 名について HAVAB-M kit により IgM 抗体を経時的に測定したところ 4 名中 3 名のものは初診時より 10 日以内に cut off index の peak が発現し、その後 2 名のものは双曲線的パターンで、他の 2 名のものは直線的パターンで下降し、発症時から 60 日~180 日間は IgM 抗体を検出することができた。

過去 4 年間の急性肝炎の年度別型式分類を行ったところ、S. 52 年は急性肝炎 18 例中 1 例、S. 53 年は 23 例中 4 例、S. 54 年は 41 例中 11 例、S. 55 年は 10 月現在までに 33 例中 6 例の A 型急性肝炎が見つかっており、集計する